八月の空に花曼荼羅を詩作した人

『福田万里子全詩集』によせて

1

福田万里子さんは、花を愛し限りなく花に近づいた、美しい精神を持った人だった。そのような美意識を持った詩人であり、岩絵具の日本画家であり、古典に通じた花のエッセイストであった人が忽然とこの世から消えてしまったことが今も信じられない。二〇〇六年八月十二日に福田万里子さんは関西の病院で亡くなった。その年の初めに自筆の年賀状をもらい、お身体は回復に向かっていると私は信じていた。前の年の退院された時に電話をもらい久しぶりに長電話となったが、声に力がこもっていたし、再び復活されるものと期待していた。

私は二〇〇五年の暮れに詩論集『詩の降り注ぐ場所』を出し、その中でも福田さんの『菅原道真公　花の歳時記』について次のように紹介した。

千年を超えても人から人へ伝わるものがあるだろうか。それを可能にする言葉にはどんな秘密が宿されているだろうか。

福田万里子さんが『飛梅』に連載していた「菅原道真公花の歳時記」（大宰府天満宮文化研究所）を一冊にまとめた。春夏秋冬の四章に分かれ、五十七節にわたって菅原道真の詩文で親しんでいた樹木や野草を論じたものだ。歴史上の菅原道真の息づかいや手触りが、千数百年の時を超えて反復され、花や家族を愛し貧しい民衆を思いやった一人の詩人の実像がよみがえってくる。詩的精神の在りかを福田さんは道真を通し私たちになげかけ、その息の長い詩の姿を指し示してくれるのだ。

（「戦後詩と内在批評９」の「詩論家たちは、どんな時間と対峙しているか／福田万里子、佐藤文夫、山田かん、星野徹、佐川亜紀たちの試み」より）

年賀状はいただいたが、詩論集への便りはなかったので、詩論集を読むにはエネルギーも必要でたぶん病状があまりよくないか、回復までまだ時間が必要なのだと推測していた。私はちょうどそのころ、私の詩論集のように詩作の現場から汲み上げられて詩論をまとめた詩論家たちの詩論集をシリーズ化して発行すること、また『浜田知章全詩集』や『鳴海英吉全詩集』など優れた詩人の詩篇のすべてを網羅した全詩集作りを根幹とする出版社を立ち上げようと計画していた。また詩誌「コールサック」で七年間翻訳し続けていた高炯烈『長詩　リトルボーイ』を企画出版しようと実務を開始していた。

『長詩　リトルボーイ』は、広島詩人である長津功三良さんら多くの詩人たちの支援があり、広島で八月五日に高炯烈さんを韓国から招待し、シンポジウムを兼ねた出版記念会も開くことができた。そんな忙しい日々が終わり、その広島での集まりのテープ起こしのチェックをしている最中に、福田万里子さんの訃報を聞いたのだった。私には福田さんにお子さんがいないので、残されたご主人はどんなにかお寂しいだろうと思われた。福田さんの多彩な芸術活動はご主人の全面的な理解や支援がなければ不可能だと思われていたからだ。

私はご主人である正人さんに、秋になったらご焼香にお伺いしたい旨のお手紙を差し上げた。十月になり私は福田さんと親しかった詩人の下村和子さんと金堀則夫さんと一緒に枚方市のご自宅にお伺いした。想像した以上にご主人の正人さんはいまだ福田さんの死を信じられない思いで、悲しみから癒えていなかった。正人さんからは福田さんとの思い出をたくさん聞かせていただいた。その中でも一番印象的だった話は、結婚当初に会社の上司と喧嘩をして会社を辞めたいと福田さんに話したことがあった。すると福田さんは、「分かりました。会社を辞めたら二人であの橋の袂で、乞食をしましょう」と平然と話したという。ご主人はその時は本当に参ったと話された。ご主人の会社はその後に日本でも有数の世界的な会社となり、ご主人は幹部となって活躍されて、今も子会社の顧問となって現役で活躍されている。福田さんのその一言がなかったなら、二人の人生は全く違ったものになったろう。ご主人は「私の楽しみは、万里子に酒の肴を作ってもらい、晩酌をしながら、話をすることでした」と語られた。本当に仲のいいご夫婦で、お互い最良のパートナーだったのだと、そんな思い出話をたくさんお聞きし、在りし日の福田さんの姿を思い浮かべた。私たちはご主人の悲しみが胸に沁みてきて、さらに喪失感が増してきたのだった。

ご主人は思い出話の後に、「万里子が前から詩集を作りたいと言って、自分の原稿料を貯金していました」と語られて、遺稿詩集の相談をされたのだった。その申し出をお聞きし私はできるなら既刊の五冊の詩集を入れた『福田万里子全詩集』を製作することを提案した。福田さんは一九九五年以降に詩集は出していないので相当数の詩篇が残されているのではないかと予想された。また、五冊の詩集にもれた詩篇もかなりあることも推測された。少なくとも五冊目の詩集『柿若葉のころ』（一九九五年）以後の詩篇すべてを収めた全詩集を目指したいと考えたのだ。私の中では、ご主人が任せてくだされば、全詩集を企画編集したいと考えていた。ご主人は私の提案に賛同下さり、全詩集の企画編集が開始されたのだ。

福田さんの自宅マンションの道を隔てて高校があり、グラウンドから若者たちの若々しい掛け声が聞こえていた。福田さんはきっと若者たちの声を聞きながら詩やエッセイを書き、絵筆を動かしていたのだろう。角部屋のマンションには植木

などを置く広いスペースがあった。そこに福田さんは何十もの野草など鉢植えを置いて、野草と植木の庭園を造っていた。秋も深まり、主が入院中だったので多くは枯れたようになっていたが、秘めた生命力を感じた。薔薇が一輪咲いていたように記憶している。私の好きなノカンゾウの花が咲いたといって写真に撮って送ってくれたのは、ついこの間のように感じられて、万里子さんがこの世にいない悲しみが増してくるのだった。私にできることは『福田万里子全詩集』に福田さんの詩作活動のすべてを残すことだという思いを確認し、枚方のご自宅を後にしたのだった。

その後は福田さんが参加された詩誌の収集を開始し、翌年の二〇〇七年の五月に再度、下村和子さんとお伺いして全詩集の方針を、既刊詩集に入っていないその当時の未収録詩篇もすべて入れることや花のエッセイの代表的なものを入れることなどの打ち合わせをした。題字にはご主人の筆文字を書いていただくことを了承してもらった。それらの話の後に、私は福田さんの絵画を見せていただけないかとご主人にお願いした。ご主人は倉庫に入れてあるのでお見せできないが、一部だが写真にしたアルバムがあるとおっしゃって探してきてくれたのだった。下村さんと一緒にそのアルバムを見ていると、思わず二人で声を上げてしまった。原爆ドームが赤と朱色の炎で燃えている「昭和残像」という絵があったからだ。驚いたことに炎は花や葉や茎の形をしていて、多くの被爆者の無念な思いを悼んでいたのだ。福田さんしか描けない原爆ドームがそこにはあった。私はその当時『原爆詩一八一人集』の編集の真最中で、装丁画をどうしようか迷いの中にあった。その日の午前中には東京で広島をテーマにしている作家に依頼するため会ったのだが、製作日程の折り合いがつかず実現しなかったのだ。装丁画の件は白紙に戻り、すぐに新幹線に乗り、枚方に向かったのだった。この「昭和残像」を発見したときに、私は福田さんが亡くなっても私をどこかで見ていて、原爆詩運動を手助けしていると確信した。福田さんは一九九三年に「コールサック」に寄稿してくれるようになってから、いつも私の詩誌運動を手紙で励まし続けてくれた。今回も私たちが行っている原爆詩運動に天上から手を差し伸べてくれたのだった。この絵しかないと私は直観した。全詩集によって詩が多くの人びとに届く前に、福田さんの絵を『原爆詩一八一人集』日本語版・英語版によって日本にとどまらず世界中に届けることができると考えたのだ。ご主人にはその場で快諾をしていただき、本当に嬉しかった。刊行された後、私が想像した以上に福田さんの「昭和残像」の評判はよくて、多くの方々から素晴らしいと絶賛された。福田さんの鎮魂の思いが花曼荼羅となって原爆ドームを焼き尽くす炎に乗り移ってしまったのだ。思えばこのような絵を描けるのは福田さんしかいなかったのだ。

福田さんは、生前五冊の詩集を出した。五冊目の詩集『柿若葉のころ』を出したのが一九九五年だから、もう十年以上も詩集を出していなかった。二〇〇〇年に入ってから病気がちで、詩集を出す機会を逸していたのだろう。本人は体調が回復すれば出したい意志はあった。実際に多くの作品を書き上げていた。六冊目の詩集がどのようになったか、それは万里子さんが不在ではもはや永遠に分からなくなってしまった。その代わり第五詩集以降の作品はもちろんのこと、それ以前でも詩集からもれた詩篇の発見されたものはすべて『全詩集』には収録された。第一詩集『風声』から紹介をしていきたい。

2

福田さんの旧姓は大坪で、祖父は旧鍋島藩の執事をしていたため、東京の渋谷の松濤町に生まれた。父は教師をしていたが結核発病のために福田さんが五歳の時の一九三八年に郷里の佐賀に引きあげた。父は高熱を押しながらも県立図書館の館長を終戦の年六月に亡くなるまで勤務していた。この十二歳の終戦時の父と叔父たちの死が、福田さんにとって決定的な意味を持ってくるのだ。福田さんは佐賀で育ち、終戦後は父の蔵書を手当たり次第に読んでいったという。そして地元の佐賀高校に入学し文芸部に入り十六歳ごろに詩を書き始めたらしい。卒業後の十九歳で時事通信社佐賀支局に入社したのは、きっと文才があることを評価されてのことだったろう。福田さんは二十三歳で福田正人さんと結婚し、福岡に暮らすようになる。そして二十八歳の時に福岡の黒田達也さんが編集発行している「アルメ」同人となり、以後四十年以上もこの詩誌で活躍することになる。二十九歳から五年間九州朝日放送のテレビとラジオの放送ライターをしていたとのことで、福田さんの詩作活動は通信社記者や放送ライターといったプロの仕事によっても鍛えられていったように思われる。佐賀・福岡時代の三十二歳で出した第一詩集『風声』には二十三篇の詩篇が収録されている。詩集題「風声」という詩はないので、福田さんが自ら考えたタイトルだったのだろう。「風声」とは何であるかを問うことが福田さんの第一詩集を理解する近道だろう。福田さんは、孤独を愛する真の芸術家だった。他者と親しくなってもどこか一線を越えない孤独さを大切にされていたように思われる。第一詩集では、詩「骨のブルース」が「風声」の謎を解く鍵になっているように感じられた。

骨のブルース

大きな手術が終わって
骨みたいなような女になった
まァ　かわいそう
妹が胸つまらせて　ハンカチ落した

でも　とうさんが死んだときは
もっと細かった
あんた　覚えてないでしょう
小さかったからね
わたしは　ぽんぽん　肋骨かぞえながら
骨　信じられるのよ　といった

骨　汗もせず灼熱の舗道に耐えた
骨　怠惰を刺した
ぴくりともせず
銃声をうけとめた
そして遠い唄ごえのように
しかも円錐の熱いコイルで
紙のような虚しさを焼いた
骨はつまり　不在ではなかった

しかしわたしは　病院でおびえた
瓶のすみれが蒼白くみえるほど
おびえた
あんなにぱあッと
なんのためにひろがり咲くのか
六月の風は湿っていたのに
すみれ　砂漠の蝶より渇いてみえた

そしてこのおびえのなかには
だれもはいることはできなかった

めざめたとき　風がさわいだ
風は小さかったが
とてもおいしかった
骨　信じられるのよ　と妹にいい
妹はへんな顔して
鼻をかんだ

骨　鳴ったかもしれない
骨　唄ったのだろう　きっと

私はこの詩を福田さんが一九九一年に出されたアンソロジーである『福田万里子詩集』（日本現代詩文庫）で初めて読んだ時に、福田さんという詩人の本質がこの詩の中に存在していると感じた。その理由を当時はうまく説明できなかったが、確かに「骨」が特別な意味を持って読むものに迫ってくる思いがした。戦争末期に病気で死んでいく父から話された言葉は、福田さんの中で極限の強さとなって「骨　信じられるのよ」という詩行に転化されていった。その前の「めざめたとき　風がさわいだ／風は小さかったが／とてもおいしかった」という三行こそが、手術後に目覚め、「骨」のような存在になった自分に降り注がれる生きる勇気のような「風」を表現しているのではないか。その意味でこの詩「骨のブルース」は、福田さんの有力な「風声」のひとつであったように思われる。福田さんはそのような自分を勇気づける存在として「骨の悲歌」である「風声」を聴いていたのだろう。

3

福田さんは一九六七年、三十四歳の時に正人さんの転勤で名古屋に転居した。隣の区に住んでいた新井豊美さんと三十七歳の時に詩画誌「ぅぁん」を創刊し、二人とも詩と絵の両方を制作する表現者として共有する場を開始する。その名古屋時代の収穫として三十八歳のときの第二詩集『夢の内側』は発行された。二十六篇の詩篇から成り立っているが、第一詩集と同じく「夢の内側」という詩はない。詩「夜のなかへ」が福田さんの独特な詩の魅力を湛えている。

夜の中へ

夕暮がくるとひとびとは急ぎ足になる
だが　なにも急ぐことはない
じたばたしても夜は
森羅万象のみこんで
うっそうと茂るのだ

おまえ　仲間はずれしよう
夜のなかへ
闇にすべての視界を捨て
視ることを――

わたしはいっぽんの老樟にもたれながら
きょう歩いてきた村からさかのぼる
村はとても明るかった
吾亦紅　赤のまんま　糸萩
野の草はやさしかった
蜜蜂　かみきり虫　こおろぎ
虫の羽音はやさしかった
やさしさとさみしさがきわだっているので
わたしのもち護るものを
きっかりと定めてくれた

ときおりしわぶくのは
道化もののえのころ草
そのかげでは水ひき草の恥らいが
風になって舞いたったりするので
見知らぬ村の小さな径に
いつまでも別れが告げられないでいる

夕暮れだとひとびとがうながしても
ああ　心臓にまでまつわりつく
藪じらみの果実よ
お前のたったひと叢のためにも
踏みとどまっていたい
網の目に循環するこの径のほとりで

老樟はすでに暗闇をあつめているが
木の肌はあたたかく
王者の胸ににていた
ちちの祖父の曾祖父の……ずっと以前からのこの古木は
わたしのははの異郷の血をも脈うたせている

昼は梟の寝屋　こどもの社
夜はなぜかははが泣き
まつわりついてわたしも泣いた
女がないた
こどもがないた
夜なきしたのに蒟蒻（こんにゃく）のお化けはでないのだ
〈大人の嘘つきめ〉

ははもこの木が好きだった
姑　喧しくて午睡もとれなかったから
こどもあやすふりして木にもたれて眠った
むずかると　木の皮をはぎ
ほらお猿さん　ほらにわとりさん
わたしの空想の入江は
みるみるゆたかになった

闇のなかから外界をみると
いまわたしにどのような充足があるか
またはないかがよくわかる

この「夜のなかへ」は長い作品だが、不思議と長さを感じさせない。福田さんの精神世界がほとばしっている奔放さを感じさせてくれる。「視界を捨て」老樟にもたれながら闇の中で今日を過ごした思い出を想起していく。この詩篇は福田さんの想像力論であり、福田さんの詩論であるかのようだ。村の野草や虫の鳴き声をすべて再現していく。すると「ちちの祖父の曾祖父の」ころの古木に福田さんが乗り移っていく。そして母が姑にいじめられてこの古木にもたれて仮眠をとった日にタイムスリップしていく。福田さんの「空想の入江」は「みるみるゆたかになった」という。「夢の内側」とは「空想の入江」のことを意味しているように私には感じられたのだ。福田さんの詩とは、このように「夢の内側」に滑り込むことによって深さを増していったのだ。この詩集を出す前ぐらいから「木下夕爾ノート」などを『名古屋近代文学史研究会報』に十数回連載し、木下夕爾の研究を開始する。この詩集を出した後に、福田さんは四十歳で「川合美術研究所に入門し、岩絵具による日本画を習う」ことになる。

4

一九七七年には福岡に戻り、西日本新聞にエッセイを連載したり、一九七九年には「西鉄ニュース」に植物画とエッセイ「花ばなの譜」の連載を始め、十年間も毎月書き続けられた。その年に四十六歳で刊行した第三詩集『発熱』には次のような巻頭言がある。「このささやかな詩集をはやくみまかりしわが身辺の人々に捧げます。／あなたがたは絶えずわたしに問いかけます。おまえは生きているか……と。」この巻頭言から福田さんは絶えず父や妹や叔父たちである死者たちから励まされて生きていることを明らかにしている。この心持ちが花を手向けることに特別な価値を持たせる福田さんの詩的精神を生み出したのであろう。収録されている三十九篇の中から詩集題の詩である「発熱」を引用する。

発　熱

わたしは無数の飛石のうえをとんでいる
もうあと二つくらいでやめておこうと思う
呼吸はみだれ
足は棒のようになっている
が　その二つめがくると
三つめを渡っている
三つめにわたしを押し出すなにかがやってくるのだ
ときには　くるりと背をむけたいのだが
背後の石は
わたしよりずっと若くて死んだ父の石
水のなかに妖精のように沈んだ小さな妹の石
生まれなかったわたしの子供の石
まだあどけない友の石
石　石　石
渡るものの石だけが背後で消える道のりを
飛ぶことは生きている証と
振り向きざまに死者らは示し
その前を　一匹の小さな獣が走り
草の実がこぼれ
やわらかな光りがなによりも美しく揺れている
爪を研ぐ〈時〉の思うつぼを
ためらいもなく超えながら
きょう

発熱のなかで
小さな獣よりも劣っていたわたし

福田さんは、三十六歳の父と二歳の妹などが若くして亡くなったことに終生、罪の意識のような思いを抱いていたのではないか。自分だけが生き残っていることへの贖罪意識のようなものが抑えきれず吹き出てくる詩なのだ。福田さんにとって戦争は、父や妹や叔父たちの命を奪ってしまったものであるという許すべからざる思いがある。福田さんは身体が強い方ではなかったらしい。発熱することは父が発熱を押して無理に仕事をして命を縮めたことを想起させられるのだろう。「発熱」は病んだ父と妹の苦悩をたちどころに想起させられるのだろう。そんな戦争に翻弄された運命を恨むことによって、福田さんはきっと鬱のような心境に苛まれたに違いない。福田さんの詩はその内面の苦悩を真摯に記述しているので、読者には重たく感じる場合もあるだろう。しかし福田さんのように肉親の死を抱えて生涯を生き、実存的な問いを抱えている人には、とてもよく分かる詩篇だと、私には思われる。いみじくも詩集題を「発熱」としたことは、それ以外に自らの詩の根源的なテーマはないのだという福田さんの意志の現れであり、「石」になった死者たちと共に生きたいという思いからだったろう。そして死者たちがいるからこそ自分の命があるのだという思いを再確認し、「小さな獣」となって死者のためにも表現を継続しようと願ったに違いない。

かつて福田さんは、お子さんが出来ないことが分かって絵を始められたという意味のことを私に語ってくれた。「生まれなかったわたしの子供の石」という言い知れぬ思いを昇華するかのように、福田さんは詩作と同時に一九七七年には新美術協会展に百号の「わが曼荼羅」を出品し新作家賞を受賞している。詩にしろ絵画にしろ、福田さんの根底には死者への終生変わることのない鎮魂があったのだと思われる。その鎮魂から死者たちの「石」を担い、死者たちの「意志」を生きようと努力されたのだと思われる。

5

一九八六年二月に五十三歳で第四詩集『雪底の部屋』を刊行し、三十二篇が収録された。この年に新潟から大阪の枚方市に転居したので、期せずして新潟での詩作をまとめた詩集になった。『文字摺草』が最も印象に残った詩篇なので引用する。

文字摺草

深い雪野を渡ったことなど
夢のようで
もうタケニグサが光っている

青い胡桃も鈴なりで
合歓も盛りだ
川も道も曲っているさきの
軒の迫ったところをすり抜け
小千谷から十日町へ
十日町に着くと
小路の奥の
織機（はた）の音のする家に入る
紬は一日に何センチも織れないが
毎日
確かに織られていて
経糸は
生
緯糸は
死
といいかえてもよく
布のあちこちに節目があるのは
死者たちが結んでいった
切ない結び目だと
仕事場で語る老婆の眼は
鴨居のうえの肖像画
あれは次男
あれは三男

――狂わなかったが不思議よ
それからわたしは
黙ってみていた
いざり織機の横に座って
長いこと
経糸に筬（おさ）を通して締める
いっぽん
いっぽん
締める
――狂わなかったが不思議よ
老婆のことばもしっかり締めて
しばらくふたりで
いのち　削っていた

やがて　財布を空っぽにして
一反かかえ
逆光の暗い部屋を出ると
外は白昼
川原の土手に
文字摺草がいっぽん
思いきりよじれて

咲いているのがみえる

福田さんは二人の子を戦争で亡くした機織りの女性と短い言葉を交わしていく。機織りの作業が永遠に続いていくような場面を構築しながら、母の悲しみを描いていく。それはあたかも福田さんが父を亡くした悲しみを数十年抱き続けてきたかのように、母の生と子の死とが交差しながら一反の織物が生まれるのを目撃していく。福田さんにとって物を生み出すとは、生み出す人の心が作品に宿らなくてはならなくて、そんな作品に出会ったら財布を空にしても作者に敬意を払って自分の手許に置きたかったのだろう。「しばらくふたりで／いのち　削っていた」とは驚かされる表現だ。たぶん福田さんの芸術とは、このような他者と自己の共通感覚である真実の悲しみを作品に昇華していくことを理想としたのだろうと思われる。文字摺草の天に捻れて咲くピンクの花のように、狂おしさを抱えながらも美しく咲くことを願って詩を書き継いでいたのだろうと思われる。

詩集題の「雪国の部屋」も上質の短編小説を読んだような物語性があり、出された川魚から父と魚釣りに行った思い出を想起しつつ、雪国の山菜料理や川魚を讃美して、雪国で愛するひとを待つ宿の女の姿を描いている。その意味では福田さんは残された人びとの悲しみに共鳴しながら、詠い続けた詩人だったのだろう。

一九八〇年に新潟に転居し一九八六年に枚方へと移る六年の間に、福田さんは新潟の詩人たちで例えば新保啓、田代芙美子らと詩誌「海構」や田中武、経田佑介、鈴木良一らと「辻」などを創刊し、詩とエッセイと絵画で多くの新潟の詩人たちに影響を与えたと聞いている。

次に一篇「幻想のつゆくさ」という気になる詩がある。

幻想のつゆくさ

遠く闇をすかしてみて
もしかしたらあれは他火
危うく頼みにしようとする孤独のまえを
ゆらゆらと通り過ぎていくのは
狐火もどきである
旅は他火
いい伝えになぞらえるには
薬草のように苦い現代（いま）
内部から皮膚を血に染めて
ひっそりと抜け出していく煙に包まれ
混み合った地下街に沈んでいきながら
挨拶もしないですむ人びとにもまれ
向う側へ渡ろうとするときの
いい知れぬ不安
ここにいようか
もっとながく　それは
行き着けぬあせりではなく
行き着いたさきの
もしかしたら炸裂しているかも知れない風景を
目にうかべたりするのだ
炸裂しているかも知れない風景？
壊れて惜しい風景があったのかと
問いかける
と　脳裡に一閃
なぜか
つゆくさがそよぐのだ
あの花の碧瑠璃を
遺しておきたい
核の冬のまえに――
わたしは
急速に階段をかけのぼり
目指す草むらを探すと
花はすでに萎んでいたが
あした咲く蕾を
なんと無数に用意して

この詩を含む詩集が発刊されたのは、ソビエト連邦時代の一九八六年四月に起きたチェルノブイリ原発事故の前の二か月前だった。福田さんが「いい知れぬ不安」と言ったことは、地球規模の社会的な危機意識をどこか汲みあげようとしていた。鋭く「いい知れぬ不安」を感受することで、あらゆる命を生かそうとする願いが、チェルノブイリのような原発事故の危険性を予知していたのかも知れない。福田さんは「つゆくさ」を通して、命を滅ぼしてしまう核兵器や原発事故の危険性を書き記したのだ。福田さんの感性は植物のセンサーのように核の自然破壊を感知してしまったようだ。根源的な社会性とは、他者の命と自己の命の共存を図り、より良き社会を作るために、他者の痛みを分かち合うことだろう。「あの花の碧瑠璃を／遺しておきたい／核の冬のまえに――」という切迫した気持ちこそが核兵器廃絶に繋がっていくことを私は信じたいと思う。

福田さんは枚方に転居した三年後の一九八九年に広島を訪ね、原爆ドームの絵である「昭和残像」を描いた。この絵が後の『原爆詩一八一人集』の表紙画になった。その動機になったのはもちろん戦死者への鎮魂であったが、この詩「幻想のつゆくさ」を書いた柔らかな感受性と時代への危機意識や予知能力であったように私には思われてくるのだ。

6

一九九五年に六十二歳で第五詩集『柿若葉のころ』を刊行

し二十三篇が収められた。詩集題の詩「柿若葉のころ」は福田さんが追い求めていた父を描いた代表的な詩篇となった。入院中の痩せ衰えた父に自宅の柿をもいで持っていくと、父は佐賀の歌人の中島哀浪の短歌を教えてくれた。「柿もぐと樹にのぼりたつ日和なり／はろばろとして背振山みゆ」という短歌を父は、遺言のように口伝えした。福田さんはその歌を支えにして生き続けてきたことは間違いなかった。

詩集の中から詩「危険物埋蔵地」を引用する。

危険物埋蔵地

原発事故がかすめた地域では
木いちごの実が摘めません
ジャムも作れないし
いま眼の前で跳びはねている
鳥やけものたちはすべて殺さなければなりません
それらはまとめられ暗い穴の中に埋められます
危険物埋蔵地――なんとウソさむい表示
地獄草子にもなかったことだ
春の花野の生命の場所が
いっせいに血を吹いて死に絶え
死んだばかりか怨念の復讐をつづけるのです
危険物埋蔵地
もう森へははいれません
野あそびでこころを洗うこともできません
セシウムの花が咲く風の方向におびえ
行ったものは帰れません
行って帰ってこれないなんて
そんな馬鹿げたことを性こりもなく
にんげんがしているなんて
神さまにどうやって説明するの？
小さな女の子の眼がそういってます
ほんとうに
なんと説明するのでしょうねえ
感動とは
昔を記憶によみがえらせて
生命をつなぐことではなかったか
「五歳の子供がニュースを聴く。六歳はデモをし七歳は砂、
車、花（の汚染）を心配する」と西ドイツの週刊誌「シ
ュテルン」は伝えている*
小さな子供たちの小さな胸は
ほんの少しの幸福で一杯になるはずなのに
森や公園のかくし絵のような愉しさは皆無で
危険物埋蔵地――
激しくみえてくる表示の予感を
暗く波動させているばかりです
きょうの風はどこから吹いてくるのだろうか
もうお話は生まれません

＊高木仁三郎『チェルノブイリ・最後の警告』より

第一詩集のタイトルである「風声」という言葉は、「骨の悲歌」でもあった。しかし「セシウムの花が咲く風の方向におびえ」るチェルノブイリ周辺では、死に到る「風声」であることの痛みを福田さんは感受している。その受け止め方は、その場所の自然に抱かれながら育つはずだった子供たちへの未来を奪った者たちへの激しい怒りであった。福田さんは社会的なテーマで詩を書くことは数少なかったが、この詩篇はその一つだ。私は『原爆詩一八一人集』にこの「危険物埋蔵地」を収録させてもらった。福田さんのこの詩と原爆ドームの絵「昭和残像」は英語版にもなり、世界中に届けられている。きっと福田さんの森や野原の花々を死者たちに手向けて、死者たちを鎮魂し続ける平和への思いは、世界の人びとの柔らかな心に届けられると信じている。

7

未収録詩篇の約二四〇篇の中でも秀作はたくさんある。例えば一九九〇年代の詩の中に「五月の風のなかで」がある。

五月の風のなかで

――立浪草――

五月の風のなかで
立浪草（たつなみそう）が揺れている
一つの花は
立ちあがる一つの波がしら
一房の花群は
連鎖する波濤
その花の一面になびくこの場所は
広やかな淡口（あわくち）むらさきの海
光りがもたらす波の変容に浸っていると
バッハが聴こえる
自分の名のためにではなく
バッハが彼の作品のことごとくに書き記した
　神の栄光のために……
という言葉
気付かれ難い空地の一隅で
丈低く揺れている
立浪草
ずっと昔
名もない草花であった頃と同じように

揺れている
そのさわやかな
無名（アノニーム）
五月の風のなかの

私は野草を眺めるのが好きで、分からない野草は図鑑で調べるが、それでも分からないものは、福田さんにお聞きした。一九九七年に広島へ浜田知章さんの講演のお供をして、広島の街を歩き回り、被爆遺跡を見る外に、野草も眺めた。その中に見かけない野草の花があった。浜田さんと長津功三良さんは大阪での浜田さんを囲む会を予定していた。福田さんも来られるかも知れないと、私はその広島の野草を長津さんに託した。福田さんはその花を色々調べてくれたが、外来種の野草で名前は分からなかったと記憶している。私には、福田さんは知っていることを何でも教えてくれる野草の先生だった。そのようにして福田さんは、花とともに生きている人だった。この立浪草にも思い出がある。一九九〇年代半ばの五月頃に、野草の話を電話でしていたところ、「立浪草が今は綺麗でしょう」と言われて、私がその花を知らないというと福田さんは信じられないというように驚いて、その花の形や色を丁寧に教えてくれた。私はその説明を聞いているうちに駅に行く途中の民家の階段の隙間にその花が群れ咲いていることを思い出した。福田さんに私の見ていた花のイメージを伝えると、そうだと納得してくれた。今でも立浪草を見かけると福田さんを思い出す。二〇〇七年五月に岡山県浅口市の岡隆夫さんの農園を訪ねた時に、石垣の隙間に咲いている立浪草を見かけた。福田さんを思い出し、岡隆夫さんにもそのことを話し、福田さんを偲んだのだった。福田さんは五月の風の中にいるように私は感じた。福田さんが野草に託した純粋な思いがこの詩には宿っている。立浪草を眺めながら福田さんはバッハの旋律を聴き、奇跡のような神の存在を感じ、その花を詩で讃美したのだ。

晩年の福田さんは枚方市で二つのエッセイ教室の講師を頼まれていた。その生徒さんたちに福田さんはとても慕われていたという。福田さんは福岡の「アルメ」、親友であった岸田美智子さんの「阿礼」や大阪の「交野が原」「樂市」の同人であり、そして「ＣＯＡＬ ＳＡＣＫ」（石炭袋）の常連の参加者であったが、福田さんが中心でやられていた雑誌はなかったと思っていた。しかしご主人の正人さんからエッセイ誌を送っていただき、考えを改めた。福田さんは一九九一年に地元の津田公民館で全八回の文章講座「わたしを書く」の講師をする。その翌年に生徒さんと一緒に「文集つだ」（六号より「雲」に誌名を変更）を創刊する。福田さんは亡くなるまで表紙画や詩とエッセイなどを書いている。また一九九四年にエッセイサークル「文文」を発足し、こちらも亡くなるまで十二年間も続け、一九九八年にはその仲間のために文集「碧」を創刊する。晩年の福田さんはこの二つのエッセイ教室の仲間たちに大きな影響を与え、参加している多くの女性たちの心の支えになっていたことをエッセイ誌から読み取れる。福田さんの美意識や真剣な生き方は、多くの地元の人びとに愛されていたのだ。よき理解者であったご主人と生徒さんに囲まれて福田さんは、さぞかし生きたかったに違いない。

最後に、福田さんが終の棲家となった枚方市のために作詞した「ひらかた・水の交響」を引用し、福田さんの冥福を祈りたい。

ひらかた・水の交響
郷土ひらかた　音風景コンサートによせて

春風に舞う花は
ひらり　ひら
肩にも　とまる
ひらかたよ　かたののみ野よ
上の世（かみ）の渚（なぎさ）の院の
なぎさ　さざめき（うおかげ）
人影も魚影も
あおい　青い　碧い
天野川は今宵

夏越（なごし）の祓（はら）い
羽根ひろやかに白鷺は降り
鵲（かささぎ）は　橋を渡しにのぼっていく
星は彦星
星は姫星
織り姫と逢い合う年も
逢い合えぬ年も
天体の久遠（くおん）は
円（つぶら）
七夕の夕べのデュオよ

待宵（まつよい）　十五夜　立待月（たちまちづき）
山田池は浮かべる
白銀（しろがね）のよそぐ面輪（おもわ）を
月の光りはあまねくて
木々のひかりを飲んでいる
小鳥はうっすら眼をあけて
あしたの恩寵を思っている
月の光はあまねくて
縄文を　弥生を　寺院を照らし
たたなづく遠山脈（とおやまなみ）を
眠るわたしらの窓辺を
照らしている

淀川の川の流れよ
ひらかたの命の水よ
生い茂る葦のみどりを
駆け抜けてひろがる無窮よ
むらさきの　にほへる　きみの
蒲生野の水も蒐めて
淀に入る　川のかずかず
宇治川　木津川　保津川の水
船橋川　穂谷川　天野川の水
入るとは出会うこと
淀川と名をかえて
川はうたう
生きるとは
愛すること
生きるとは
手をさしのべること
生きるとは
流れをつくること
流れて海へ
とどこおりなく
海へ
また逢うために

ああ　日々の
　美しい水の交響

福田さんのすべての思いがこめられて、この詩には源流が集まって大河になるように言葉が響きあっている。福田さんが最後の詩集をどのように構想していたかは、永遠の謎だが、連作の「水の島」と「夏の絵本」「伝言板」があり、また水鳥、草木、花ばなのたくさんの詩篇がある。数は少ないが「燃えるカンナの赤への質問――戦争の記憶――」「みんな蒼ざめて」「どうか修復の手を入れないで」などの反戦・平和を願う詩篇もある。未収録詩篇から各自が想像的に編集を試みて未知の詩集を編んでいただければと願う。そうであるなら福田万里子さんもきっと喜んでくれるのではないかと思われる。八月の空に花曼荼羅を描き、それを胸に秘めて詩作した福田さんを多くの未知の読者にも読んでほしいと願っている。

ご主人の正人さんには、全詩集の編集に全面協力をしていただき、心よりお礼を申し上げたい。